

看護のアジェンダ

看護・医療界の“いま”を見つめ直し、読み解き、未来に向けたアジェンダ(検討課題)を提示します。

〈第242回〉

「議事録事件」とやる気

井部俊子

株式会社井部看護管理研究所
聖路加国際大学名誉教授

視点

人口減少時代の 看護師確保の取り組み

木村 緑

八戸学院大学健康医療学部看護学科 教授



●図 八戸学院大学むつ下北キャンパス
校舎イメージ図

とが縁となり、就職や臨床看護師に関する講義を設けるなど、看護教育における協働の実績と信頼関係があったことが、今回の連携実現につながった。
◆むつ下北キャンパスから地域で活躍する看護師を

同キャンパスではオンライン講義とともに本学の拠点である美保野キャンパスでの対面講義を週2回実施し、臨地実習はむつ総合病院をはじめとするむつ市内の施設等で実施する予定である。また、むつ市は一部事務組合下北医療センターと協力し、同キャンパスで学ぶ学生に対し入学金と学費の全額を貸与し、卒業後むつ総合病院で10年間勤務することで返済を全額免除する新たな修学資金貸与制度を設けるなど、看護師をめざす学生の経済的負担や自宅からの通学負担の軽減にも対応している。

「八戸学院大学むつ下北キャンパス」の開設は、下北圏域やその近隣で看護師をめざす学生が地域で学び、地域医療を支える仕組みを創出する大きな一歩である。今後人口減少が進み全国で看護師不足の問題が生じた際には、本取り組みが対応策のモデルとなり得るだろう。

●参考文献・URL

- 1) 総務省統計局. 令和2年国勢調査. 2021
- 2) 国立社会保障・人口問題研究所. 日本 の地域別将来人口[令和5(2023)年推計]. 2023

●きむら・みどり氏/2005年4月より臨床看護師として青森県内の精神科病院に勤務し、12年八戸学院短大看護学科専任講師に着任。16年より八戸学院大健康医療学部看護学科講師を務め、23年4月より同大教授として精神看護学領域に携わる。24年からは同大むつ下北キャンパスプロジェクト委員として「八戸学院大学むつ下北キャンパス」設立の準備に携わる。博士(社会医学)。

2024年3月、八戸学院大学健康医療学部看護学科と青森県むつ市は、青森県の下北圏域における看護師不足解消のため、むつ市内に看護学科に特化した「八戸学院大学むつ下北キャンパス」(図)を設置する包括連携協定を締結した。2025年4月からの開設に向け、現在準備を進めている。

同キャンパスは看護師・保健師国家試験の受験資格取得をめざす学生を受け入れ、下北地域の保健医療活動、健康増進に看護の実践者として貢献できる人材を育成することを目的としている。

◆人口減少と看護師不足の深刻化

開設に至る背景には青森県の人口減少および看護師確保の問題がある。青森県の総人口は2020年時点で約123万8000人¹⁾であったが今後も減少傾向が見込まれ、2045年には約83万3000人ほどになると推計されている²⁾。また、人口減少に伴い高齢化も全国平均より速く進行している。このような急激な環境変化に対応するには、その地域にふさわしいバランスの取れた医療・介護サービスの提供体制の構築と、その担い手である看護師の確保が必要となってくる。

下北地域保健医療圏で唯一の中核病院である下北医療センターむつ総合病院は看護師不足が顕著であり、その解消は喫緊の課題とされてきた。むつ市を含む下北圏域では、2004年に県立田名部高等学校衛生看護科が閉科となつて以来、看護師養成所の空白地帯となつていたため、看護師を志望する学生は、圏域外へ転出する必要があった。一度圏域外へ転出した学生が再びむつ市に戻ってくる割合は低いのが現実だ。本学でも教育目標の1つに「医療過疎地やへき地など地域特性の理解のもと、地域の看護活動に関する研究に積極的に取り組むことのできる看護師・保健師を養成する」ことを掲げているが、毎年、一定数の卒業生は県外に就職している現状にある。

このように、本学とむつ市が抱える課題は共有できる部分が存在していた。加えて、むつ総合病院と本学は2009年に看護学実習病院の協定を結んだこ

少し話は変わりますが、第214回「看護のアジェンダ」で書いた「行いてその責をとる」の一部を引用します。

「議して決せず」とは、議論は行われるものの、最も大切な結論を出さないで会議を終わらせてしまうことである。ただ会話をして終わるのではなく、会議の最後には必ず結論を出し、どのような行動をするのかを明確にすることが必要不可欠とされる。これらをきちんと記録に残す書記の役割はきわめて重要である。議事

録の取り方で書記の「概念化力」がわかる。

というわけで、師長会議の議長は看護部長が担い、議事録の作成(つまり書記)は持ち回りにして、概念化力を磨く機会とすることができます。その際、看護部長は必ず議事録案を読み、適切な「指導」をすることが必須です。概念化を促すための指導であり、不愉快な小言や嫌みにならないようにしなければなりません。議事録の成功は「やる気」に直結しているのですから。

ません)。

・議事録は逐語録ではない。録音のテープ起こしのような記録にしない。

中尾根さんは、良い議事録を作成するために、議事録のサンプルを取り寄せ、フォーマット(型)を決めました。会議中のやり取りを録音しながら、手元の資料にメモをしてキーワードを残しておくことにしました。そうすると、何が重要なことであったのかがわかるようになりました。さらに録音を聞いて、重要事項を確認しました。

中尾根さんはひと知れず奮闘していたのです(そのようなことはつゆ知らず、私は議事録に檄を飛ばしていたようです)。話をまとめることに自信を持っていたのに、会議で何が話されているのかがわからない時期が続き、中尾根さんは落ち込みました。

「落ち込み」から「やる気」へ

2014年1月27日、中尾根さんに一通のメールが届きました。塾長からでした。「わかりやすく意義のある議事録を作っていただきありがとうございます」。このメールをきっかけに、中尾根さんは議事録をもっと良いものにしたいと決心しました。

これで議事録事件は終結したかと思いましたが、翌年のある日の会議で、中尾根さんが議事録の報告をしたあとに「ところでお名前は?」と座長(であった私)が問うたと言うのです。今となつては私自身、記憶にないのですが、(多分にふざけて聞いたのではないかと思うのですが)中尾根さんはこうとらえていました。「発言しない人はいないのも同然ですから」と。

中尾根さんの120本に及ぶ議事録作成者としての体験は、一通のメールによるポジティブフィードバックを契機として上昇気流に乗りました。議事録を作ることで過去の会議内容を尋ねられる機会が増え、会議に最も精通しているのは自分だと思えるようになったと言います。

*

看護管理塾第9章「やる気にさせる職場」を担当した中尾根さんは、このように強調します。①「やる気」になるのは本人である、②管理者は衛生要因を整え、動機づけ要因を支援する、③管理者は自らが「やる気」を感じる過程を知っていることが肝要。

今回の議事録事件は、上記③を説明する根拠となった体験であることを私は再認識することになりました。

看護管理塾(聖路加国際大学看護リカレント教育部主催、全10回)第9章は、「やる気にさせる職場」が主題でした。担当講師は中尾根功嗣さん(株式会社ファムリッジ代表取締役)。およそ3時間半のセッションです。看護管理塾は、各回の担当講師を決めて、講義とグループワークで進行します。毎回のコンテンツは6人の講師陣で“厳しい”意見交換を行い練られます。2024年度は発足してから11年目を迎え、看護管理の継続研修として一定の役割を果たしてきました。

第9章「やる気にさせる職場」を担当することになった中尾根さんは、「やる気生まれる要因と失われる要因」として、自分自身の看護管理塾における体験を語りました。いみじくもその体験に、当時、塾長であった私が登場します。私にとっても大変興味深く、貴重な振り返りの機会となりました。そのお裾分けを本稿でいたします。題して、「議事録事件」です。

「こんなものは議事録と言えない」

2013年、看護管理塾の講師として仲間入りした中尾根さんは最年少でした。会社を起業して1年目。看護管理塾の「仲間に加えてもらう」高揚感があったと言います。看護管理塾チームの一員となった中尾根さんの役割は、会議の議事録をとることでした。

これが大変なことでした。彼の言葉を借りると、「散々な目に遭った」のです。何度も看護管理塾を辞めようと思ったそうです。議事録とは何かがわかっていなかった中尾根さんは、会議で話し合われたことを、自分の記憶を頼りに日記のように書き連ねていました。議事録の体をなしていなかったのです。

「こんなものは議事録と言えない」と当時塾長であった私はムチを打ちました。当時の私がどんな指摘をしたのかを中尾根さんに改めて尋ねたところ、彼はパソコンを開きながら、わかりやすく説明してくれました。

- ・議事録に敬称は不要である。
- ・見出しとコンテンツは一致させる。
- ・項目の構成は、抽象から具象へと整理する。
- ・決定したことは何か、検討しなければならないことは何かわかるように書く。
- ・会議中に話し合った“どうしようもない”話をどうまとめるか、捨象してよいものを判断しなければならない(注:この作業は文脈を理解しておかないとでき

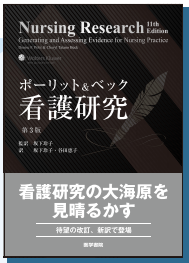
「新訳」で生まれ変わる看護研究の羅針盤

ポーリット & ベック 看護研究 第3版

Nursing Research; Generating and Assessing Evidence for Nursing Practice, 11ed

初学者にとって、看護研究の全容を掴まんとすることは、果てしない大海原に漕ぎ出すに等しい困難がある。航海を可能とする羅針盤のように、本書は看護研究に臨む皆さんの道標となるだろう。明瞭な「新訳」により、さらに可読性が増した本書は、これまで以上に多くの読者の支えとなることは間違いない。

著 D. F. ポーリット
C. T. ベック
監訳 坂下玲子
訳 坂下玲子
谷田恵子



意思決定に関係する各要素を1つの表に可視化！ 意思決定支援ツールOOVLがわかる

意思決定支援ツールOOVL活用入門

意思決定に関わる「選択肢」、「判断基準(成果)」とその「重みづけ」、「実現可能性」の各要素を1つの表にすることで総合的に状況を把握・検討できる意思決定支援ツール「OOVL」を紹介し、臨床看護場面や看護管理に活用するための入門書。OOVLの概説とOOVLがなぜ必要とされるのかを記した総論、OOVL活用のヒントを盛り込んだ事例の2部構成。事例を通じてOOVLの看護場面での活用が具体的に理解できる。

編集 内橋 恵
青山ヒフミ

